



TITLE:

# 農家者流の經濟思想

AUTHOR(S):

小島, 祐馬

---

CITATION:

小島, 祐馬. 農家者流の經濟思想. 經濟論叢 1919, 9(3): 343-356

ISSUE DATE:

1919-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127574>

RIGHT:

# 京都帝國大學經濟學會 經濟論叢

第九卷 第三號

大正八年九月一日發行

## 論說

農家者流の經濟思想……………

法學士  
文學士

小島 祐馬

住居税の利害と高級住居税の提案……………

法學博士

神戸 正雄

經濟的行爲と道德的行爲との關係……………

法學博士

田島 錦治

社會政策上より觀たる吾國の財政……………

法學博士

小川 郷太郎

## 時事問題

同盟罷業の頻發……………

法學博士

戸田 海市

朝鮮統治の根本問題……………

法學博士

山本 美越乃

銀行の手形引受制度……………

法學士

大森 研造

## 雜錄

米價の高低と一般物價の高低……………

法學博士

河田 嗣郎

社會問題評論(一)……………

法學博士

神戸 正雄

和田垣、内田兩博士の永眠を悼む……………

法學博士

神戸 正雄

京都帝國大學經濟學部規程●經濟學部大正九年度授業擔當

# 經濟論叢

第九卷 第三號

總卷第五十一號

大正八年九月發行

論

說

## 農家者流の經濟思想

小島祐馬

一

農家者流は又單に農家とも稱し、支那戰國時代に起りたる一學派の名である。後世農家と言へば百穀を播き農桑を勸むる學派なりと爲し、農家の書として『齊民要術』『耒耜經』『農書』『蠶書』『農桑輯要』『農政全書』等を列舉し、甚しきは『相馬經』『鷹經』『竹譜』『茶經』の類までも之に入る<sup>1)</sup>ことがある。是れは全く農家の本旨を失ひたる者と思はるるが、斯く農家の本旨後世に昧くなりしは蓋し『漢書』藝文志が其因を爲すものであらう。同志を觀れば農九家として『神農』二十篇『野老』十七篇『宰氏』十七篇『董安國』十六篇『尹都尉』十四篇『趙氏』五篇『汜勝之』十八篇『王氏』六篇『祭癸』一篇を擧げたる後、次の如き評語が加へられて居る。

1) 『四庫全書總目提要』卷一百二參照

農家者流蓋出於農稷之官。播百穀勸耕桑。以足衣食。故八政。一曰食。二曰貨。孔子曰。所重民食。此其所長也。及鄙者爲之。以爲無所事聖王。欲使君臣並耕。詩中上下之序<sup>2)</sup>。其意農家の本旨を以て百穀を播き耕桑を勸むるに在りとし、其末流に及んで則ち變じて社會的革命的議論を爲すに至つたものとして居る。然るに吾人は此言を以て眞に農家を知るものと爲すに躊躇せざるを得ないのである。

『漢書藝文志』に擧ぐる所の農家の書他書の中に引用せられたる斷片を除く外今日一も傳はるもの無きを以て、其内容の如何なるものなるかを確知するを得ざるも、此等の斷片並に班固の評語より觀れば、此等の書は何れもただ農事に關する著書に外ならざりしことを推測するに難からざるものがある。然るに一體六經は勿論のこと戰國諸子の學皆道を説いたものである、更に適切に言はば經國濟民の理想を述べたものである。班固の如きも「諸子十家、其可觀者九家而已」と曰ひ、儒家道家陰陽家法家名家墨家縱橫家雜家に農家を加へて九家と爲して居る。是れ戰國以來著名の學派であつたに相違ない。而して農家を除く外の八家は、何れも皆天下國家を治むる大理想を述べて居らないものは無いに反し、獨り農家のみは單に農事に關する事實を言ふに過ぎずとするは甚其權衡を失するの觀がある。若し單に農事を言ふ農家を九家の中に入るならば、兵事を言ふ兵家の如きも當然九家と同列に置くべきではあるまいか。況んや班固は前の農九家の外、別

2) 班固『漢書』藝文志  
 3) 最近其片書隻語を古書の中より輯録したるものに馬國翰の『玉函山房輯佚書』あり  
 4) 『呂氏春秋』に所謂神農之教、『淮南子』『文子』等に所謂神農之法といふもの經國濟民國下の理想に亘るあり、余が後に謂ふ所の農家の理想の片影には相違なからんも、馬國翰が之を以て『神農』書の斷編と爲すは當らざるに似たり。是『漢書』注『神農』の「道耕農事託之神農」の語を參照せば思半に過ぐるものあらん。  
 5) 『漢書』藝文志

に『神農教田相土耕種』十四卷『種樹臧果相蠶』十三卷の如き農事最要の書を、諸子略の農家の下に列せずして數術略の雜占の中に列して居ること、恰も天文五行に關する書を諸子略の陰陽家の下に列せずして數術略の天文五行の下に列して居ると同一筆法である。元來班固の此分類法は劉向の『七略』に本づく者にして劉向亦必ず承くる所があつたに相違ない。若し俱に農事を言ふものならば分つて二類と爲してはならぬ。今別に農事の書を農家の外に列する所より見れば、本來農家の言ふ所斷じて農事に非ざること、漢人已に之を知りたりし確證と爲すことを得やう。即ち農家は單に専ら農事を詳にする學派には非ずして、他の諸子と同じく經國濟民の理想を述べたるもの従つて班固が農家の正統と考へたものは却つて其本流にして、末流と考へたものが寧ろ其正統であると斷ずる方が妥當の見解であらうと思はれる。<sup>6)</sup>

農家の學が耕種蠶桑の農事を言ふに非ずして經國濟民の理想を述べたるものなること前述の如しとするならば、其所謂理想は如何なる書に依つて窺ふことを得るか。今日農家の專書とては一も傳はるものが無い。唯斷編として殘存せるものには『尸子』に神農の事蹟を述べて

神農氏夫負妻戴。以治天下。堯曰。朕之比神農。猶三且之與昏也。<sup>7)</sup>

神農氏並耕而食。以勸農也。<sup>8)</sup>

と言ひ、『呂氏春秋』には神農の教を擧げて（淮南子『齊俗訓』劉子新論『貴農篇』後漢書『王符傳』註引『文子』に神農之法といふもの此文と大同小異である）

6) 班固は當時農家僅に空名を存して其實を知り難かりしが爲めか其誤を爲さしめざるものか、或は爲めに二者の申何れか其に居るであらう。  
7) 『太平御覽』皇王部引  
8) 『北堂書鈔』帝王部引

神農之教曰。士有「當年而不耕者」。則天下或受其饑矣。女有「當年而不績者」。則天下或受其寒矣。故身親耕。妻親績。所以見致「民利」也。<sup>9)</sup>

と言つて居る。此等を以て漢志に所謂「神農」書の斷編となすは不可ならんも、以て農家の思想の片影と認むるに差支はないやうである。併し何れも片言隻辭未だ以て一學派の大理想を見出すに十分なる材料を提供して居らないのである。獨「孟子」の中に「神農の言を爲す者許行」の說を擧げて論評せるもの、僅に略農家の梗概を存するものがあるやうである。農家の宗旨を知らんと欲せば當に此を以て依據と爲すべきであらう。朱子は其下に註して次の如く謂つて居る。

神農炎帝。神農氏始爲「耒耜」。教「民稼穡」者也。爲「其言」者。史遷所謂農家者流也。<sup>11)</sup> (太史公六家指要には農家を言はす)

す。班固の藝文志に至つて始めて「農家者流の號」あり。此に史遷といふは疑ふらくは班固の誤が)

許行の說は班固の所謂農家末流の說と爲すものと一致するものなるも、吾人は前述の理由により之を以て農家の眞の理想と認むることが敢て失當でないと思ふ。且又孟子は元來客氣ありて其諸家の學を闢くに當り論評往々當を失することあるも、而も能く諸家宗旨の在る所を知り要を握つて之を言ふに妙を得て居る。其の墨子に於ては「兼愛」と言ひ、楊子に於ては「爲我」<sup>12)</sup>と言ふが如き、皆其學を隱括するに足るものがある。農家に於ても恐らく其思想の要點を擲んで居るものがあると思ふ。前に擧ぐる「尸子」「呂氏春秋」等の引用語の如きも實は「孟子」の語に對照

9) 類篇  
10) 文公上  
11) 孟子集註  
12) 孟子集註

して始めて其の農家の説の一片ならんと肯かるるわけである。

『孟子』の記する所によれば農家の始祖は一見神農氏なるかの如く思はるるのであるが、併しもしかかる連斷をなさばそは大なる誤である。凡そ戰國時代の諸子は自ら理想を立てて社會の變革を唱道するに當り、多く古人に託して其説を爲すのである。而して他の諸子に在りては或は堯舜を稱し、或は黃帝を引くのであるが、農家は更に遡つて其説を神農に附會したものである。一體神農氏のことは戰國に及んで世に出でたる傳説にして、彼は恐らく實在の人物ではあるまい。其事蹟として傳へらるる所、農家の理想に適ふものがあるが爲め取つて以て其學の始祖と仰ぐに至つたのであらう。『漢書』藝文志には「農家者流蓋出於農稷之官」とあり。班固は獨り農家のみならず九家夫々古の官司に出づと爲すのであるが、其説恐らく牽強附會であらうと思ふ。其詳細に至つては煩を避けて今姑く説明を省く。若し然らば農家學説の創設者又は宣傳者は果して何人なりや。或は許行を以て農家の始祖とする者あるも是れ固より確證あるに非ず。或は許行の學を尸子(名は倭)に出づと爲す者あるも、尸子はもと雜家に屬し諸家の長を併せ取るもの、僅に片言の一致より許行の師と爲すは武斷に失する。『漢書』藝文志には「神農」二十篇の下に顔師古が『劉向別錄』を引きて「疑李悝及商君所説」と言つて居る。吾人は元來『神農』の一書を以て農家の理想を傳へたるものとなさざること前述の如くなるを以て、従つて農家の學が法家の諸子に出でたりと

13) 『易』繫辭下傳『易』の十翼は孔子の作に非ず戰國時代の學者の手に成るもの。

14) 江瑛『讀子居言』卷二

15) 焦贛『孟子正義』滕文公上。

する見解にも到底肯し能はざる者である。要之今日の所農家の始祖は不明なりと爲すの外致方なく、其宣傳者としては唯一人の許行を挙げ得るに止まるのである。

## 二

農家の學說の梗概は略載せて『孟子』の書中に在ることは前に既に述ぶる所の如し。今農家の學說に就いて孟子の提ぐる所の要領は果して如何。孟子の農家に對する批評は其の陳相との問答によつて發せられて居る。陳相はもと儒家陳良の門人であつたが、其弟辛と耒耜を負うて宋より滕の國に至り、此處に神農の言を爲す者許行に會ひて大に其說を悦び、盡く今迄の學を棄てて之に學びたるものである。陳相孟子を見て許行の言を述べて次の如く口つて居る。

滕君則誠賢君也。雖<sup>レ</sup>然未<sup>レ</sup>聞<sup>レ</sup>道也。賢者與<sup>レ</sup>民並耕而食。糞<sup>レ</sup>殮<sup>レ</sup>而治。今也滕有<sup>レ</sup>倉廩府庫。則是厲<sup>レ</sup>民而以自養也。惡得<sup>レ</sup>賢<sup>16)</sup>。

ここに「與<sup>レ</sup>民並耕而食、糞<sup>レ</sup>殮<sup>レ</sup>而治」といふもの、即ち實に農家宗旨の根本觀念と認むべき者にして、『漢書』藝文志に所謂「君臣並耕」の説といふもの即ち是れである。其主意とする所は、滕國の君主の如きも自ら耕作し自ら炊爨して、而して其傍政事に鞅掌してこそ始めて賢君と稱するを得べく、人民の折角筋骨を消耗して得たる米粟器用を取上げて倉廩府庫に收め、之によつて衣食して敢て怪まざる如きは未だ道を知ると謂ふを得ずと爲すのである。尤彼は獨り君主に對し

16) 『孟子』滕文公上。



てのみ庶民と同じく肉體的勞働を強ゆるものではない。君主既に然り、君主以下治者の階級に在る卿大夫士に於ては固より言を須たざる所である。此一文によつて許行の意を忖度するに、彼は一面に於て天下の各人に對し盡く肉體的勞働を要求すると同時に、他の一面に於て自ら肉體的勞働に服せずして他人の勞働の結果に衣食するものをば無爲徒食の徒として極力之を排斥せんとするものである。彼は固より肉體的勞働の外に精神的勞働あることを知らざる者ではない。又其精神的勞働を以て全然世に用なきものと爲す者でもない。唯精神的勞働に對しては肉體的勞働の如く重要を認めず、こは人民中の或者が肉體的勞働に服する餘暇を以て從事して然るべきものと看做すに似たり。尤ここに精神的勞働といふ語を用ひたるも、前の一文より觀てこは主として社會の秩序を維持すべき政治上の精神的勞働の義に用ひたるものにて、生産に關する企業上若くは技術上の精神的勞働の如きは單純なる生産を理想とする農家者流の眼中に恐らく全然無き所なりしならん。猶各人は自己の肉體的勞働の結果に衣食すべく、倉廩府庫は民を病ましむるの具なりと爲すは、單に肉體的勞働を尊重し各人の勞逸を齊しくせんとする以外に、財の不平等なる分配を防ぎ、不公平なる社會の階級を打破し、天下の貧富を略均しくし、以て上下の序を平にせんとする用意の存するものなることを知らねばならぬ。此主旨は次の一項と對照して考ふるとき更に明白の度を加ふることと思ふ。

次に陳相と孟子との問答の中に明かに示されて居る農家學說の要旨としては、則ち左に掲ぐる陳相の言がある。曰はく

從<sub>レ</sub>許子之道。則市買不貳。國中無<sub>レ</sub>僞。雖<sub>レ</sub>使五尺之童適<sub>レ</sub>市。莫<sub>レ</sub>之或<sub>レ</sub>欺。布帛長短同。則賈相若。麻縹絲絮輕重同。則賈相若。五穀多寡同。則賈相若。屨大小同。則賈相若。<sup>17)</sup>

是れ即ち物價齊一の論である。上文の意を約言すれば、天下諸種の貨物其質と量と相齊しき者に在りては其價格を略齊一にせんとするの意見である。其長短輕重多寡大小を言ひて精粗美惡を言はざるの故を以て、是れ單に量を論じて質を問はざるものなりと爲すは寧ろ曲解にして、陳相の意恐らく品質の同じきものといふことを前提として述べたものであらう。同種の貨物其質と量と同じくば其價格を略一定せんとするは、主として各人の暴利を取るを禁じ、生産費に相當せざる不當利得を得ること勿らしめんとするものなるが、此の如くにして不勞所得は嚴禁され、自由競争は制限され、各人はすべて恰も自己の勞働に相當する對價を得て生活を支持すべき結果、一般の權衡を失して富者と爲り得るが如き財の蓄積は到底獲べからざることとなるわけである。

猶農家が勞働を重んずるといふことに關聯して看過すべからざるは其儉素を尙ふことである。

此事實は其の「其徒數十人皆衣褐」<sup>18)</sup>といひ、又「許子冠乎、曰冠、曰奚冠、曰冠<sub>レ</sub>素」<sup>19)</sup>といへるが如きによりて其一斑を知ることが出来る。蓋勤勞と儉素とは他の支那思想に於て必ず相離るべから

ざるが如く、農家の思想に於ても亦然るのである。唯農家に於ては其が稍極端に失する。

農家が肉體的労働を尊重するものなることは前に既に述ぶる所なるが、其學派が既に農を以て名づけられ、又「與民並耕」を以て宗旨とすと言はば、其肉體的労働は全く農業労働に限るが如く見ゆるも、併し其は必しも然らざるものがある。固より其労働は生産の必要上農業労働を主眼とするものなれど、而も猶他の労働も之を認めないわけでは無い。元來古の諸子は必ず其倡ふる所の學を以て先づ之を其躬に行ひ、以て天下の法と爲すを例とする。若し農家の學説が専ら農業労働に限るものであるならば、其住居必ず常處あつて田畝に従事しなければならぬ。然るに許子は楚より滕に行き其居を常にするものでない。且滕文公も唯之一廬を與へて氓と爲したのみで、未だ之に百畝を與へて耕種せしめたるを聞かぬ。是れを以ても許子の學は必しも農業労働にのみ汲々たるものに非ざることがわかる。況んや『孟子』には

其徒數十人皆衣赭。捆屨織席以爲食。<sup>20)</sup>

と言つて居る。これは當時の實情を寫したもので誤は無からうと思ふが、是れを以て觀れば農家の徒必しも耕種を以て業とするとは限らないことを知るに足るのである。(尤『孟子』には上文の後に「許子冠乎、曰冠、曰奚冠、曰冠素、曰自織之與、曰否、以粟易之、曰許子奚爲不自織、曰害於耕」<sup>21)</sup>とありて、許行が當時耕作に従事せしかの如くにも見え、前文と相容れざる觀ある

20) 21) 『孟子』滕文公上。

も、是れ恐らく許行の從來楚に在りて農に従事したる間の生活に本づきて言ふものなるべく、從つて全く前文と矛盾するものではあるまい。(猶又

許子何不爲<sub>下</sub>陶治。舍皆取<sub>二</sub>諸其宮中<sub>一</sub>而用<sub>レ</sub>之。何爲紛紛然與<sub>二</sub>百工<sub>一</sub>交易。何許子之不<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>煩。曰。百工之事。固不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>耕且爲<sub>一</sub>也。<sup>22)</sup>

と言へるを見れば、農家が農業の外に獨立して百工の事を經營するを是認せること明にして、且それと同時に農家は各人の自給經濟を主張するものに非ず、農夫百工の間に分業の必要を認め又彼等相互間の交易の缺ぐべからざることも知りたることは更に説明を要せざる所であらう。

又農家は神農を祖とすと言はば、全然農を強ゆる學派の如くにも見ゆれど、然し神農氏の事績は『易』に次の如き記事があつて、これが神農に關する根本の知識となつて居る。曰はく

包犧氏沒。神農氏作。斲<sub>レ</sub>木爲<sub>レ</sub>耜。揉<sub>レ</sub>木爲<sub>レ</sub>耒。耒耨之利以教<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。……日中爲<sub>レ</sub>市。致<sub>二</sub>天下之民<sub>一</sub>。聚<sub>二</sub>天下之貨<sub>一</sub>。交易而退。各得<sub>二</sub>其所<sub>一</sub>。<sup>23)</sup>

即ち神農は農業を教ふると共に交易をも教へ、民各其所を得たとある。農家が單に農業を重んずるのみならず、猶百貨の交易を以て當然のこととなせるは、其の神農を祖とすることによりても推知することが出来る。其の農を以て家に名づけたるは固より農を以て主要なる勞働と爲すが故に、之を以て肉體的勞働の代表語として用ひたるに外ならぬものであらう。

<sup>22)</sup> 『孟子』滕文公上  
<sup>23)</sup> 『易』繫辭下傳

此外今一つ注意したきは『孟子』の次の一文である。曰はく

有<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>神農之言<sub>一</sub>者許行<sub>上</sub>。自<sub>レ</sub>楚之<sub>レ</sub>滕。踵<sub>レ</sub>門而告<sub>二</sub>文公<sub>一</sub>曰。遠方之人聞<sub>二</sub>君行<sub>レ</sub>仁政<sub>一</sub>。願受<sub>二</sub>一廛<sub>一</sub>而爲<sub>レ</sub>氓。文公與<sub>二</sub>之<sub>一</sub>處。<sup>24)</sup>

是れによれば許行は滕文公仁政を行ふを慕ひて滕に來り歸したることになつて居る。是れによれば農家の理想は仁政と不離の關係ある如くに見ゆる。然らば其所謂仁政とは何であるか。朱子は其下に註して「仁政上章所言井地之法也」<sup>25)</sup>と解して井田法のことと爲して居る。然るに其所謂上章を見れば滕文公畢戦をして井地の法を孟子に問はれたる記事はあるも、そのみにて果して井地の法を滕に實施せしや否やは明ならざれば、仁政を以て直ちに井地の法と解するは早計に失するの嫌がある。さりとて廣義に於ける所謂道德といふものを力説するの意は農家者流には恐らく無ささうに見ゆる。其「從<sub>二</sub>許子之道<sub>一</sub>、市賈不<sub>レ</sub>貳、國中無<sub>レ</sub>僞」の語より推すに、農家の意道德を蔑如するものに非ざるも、經濟政策其宜しきを得ば人々の道德性は自ら支持さるものと考へたのであるまいか。されば是處に所謂仁政とは、其施設の詳は明ならざるも、兎も角も民を本とし人民を愛護するの政治を指すものなるべく、是れやがて農家の理想とする所と其根本義に於て合致する所ありと爲したものであらう。

### 三

以上を以て『孟子』に見はれたる農家宗旨の大要を述べた積りであるが終りに以上農家の宗旨に

24) 『孟子』滕文公上  
25) 『孟子集註』滕文公上

對する孟子の批評に向つて一瞥を注いで試たい。孟子は「與民並耕」の説に對して次の如き評語を下して居る。曰はく

然則治天下獨可耕且爲與。有大人之事。有小事之事。且一人之身而百工之所爲備。如必自爲而後用之。是率天下而路也。故曰。或勞心。或勞力。勞心者治人。勞力者治於人。治於人者食人。治人者食於人。天下之通義也。<sup>26)</sup>

此語の中には百工分業の必要が説かれてあるが、これは前述の如く農家も既に認むる所にして特に此に之を言ふを要せぬ。孟子と雖固より之を説法するの意ではあるまい。唯百工分業の必要あると同じく、大人即ち治者の事と、小人即ち被治者の事との間に分業の必要ありといふのが其主眼とする所であらう。孟子は是處に勞働に精神的勞働と肉體的勞働の二種あることを説き、精神的勞働に服する者は治者の地位に立ち、被治者より養はるべきものにして、肉體的勞働に服する者は被治者の地位に立ち、治者を養ふべきものとし、是れ即ち天下の通義なりと言つて居る。孟子が肉體的勞働の外に精神的勞働の重要を説けるは誠に善し。但精神的勞働に服する者は治者の地位に立ち、被治者より養はるべきものなりといふは、道德的階級制度を是認する儒家の間に在りてこそ成程通義なるべきも、かゝる道德的階級制度を認めざる農家の如きに在りては、固より之を通義と認むる筈が無いのである。此點は兩家思想の岐る所、今少しく詳細に論議すべきであつた

と思ふ。

次に物價齊一の論に對しては孟子は次の如く攻撃して居る。曰はく

夫物之不齊。物之情也。或相倍徙。或相什伯。或相千萬。子比而同之。是亂天下也。巨屨小屨同價。人豈爲之哉。從許子之道。相率而爲僞者也。惡能治國家。<sup>27)</sup>

是れ曲解に非ずんば誤解である。農家と雖本來齊しからざる物の價格を齊一にせんとするものに非ざることは前に述ぶる所によりて既に明である。此點に於て孟子の攻撃は恐らく故らに辯を弄するの譏を免れざるものであらう。

農家の思想は戰國時代に在りても餘程飛び離れた思想の如くにも見ゆるのであるが、併し部分的には他の諸子の思想と頗る類似するものがないではない。儒家に於ても固より農を重んずることを其學說の要旨と爲して居り、又藉田といふことを唱へて後世天子は自ら田を耕すの禮を行ふこととなつて居るが、これは一見農家の思想によく似通へるものである。尤儒家の農を重んずるは主として人民の生活資料を得べき主要なる産業なるが爲めであつて、勞働といふことを基本として生み出されたる思想ではない。又藉田といふことも君主が單に敬を天祖の祭に致し、兼ねて民間の農業を獎勵するの意に出でたるものにして、君主自ら其地位を下して庶民と齊しうするの意は毛頭ないのである。是れ其大に異なる點である。更に農家の「與民並耕而食、養飧而治」とい

27) 『孟子』滕文公上  
28) 六經すべて重農の意を示さざるなし  
29) 『禮記』祭統『漢書』文帝本紀等參照。『呂氏春秋』上農篇に天子藉田のこゝとあり、學者此篇を以て農家の書の斷編と爲すものもあるも此篇初めに君權の尊嚴を説く、余が所謂農家の思想とは相容れざるものなり。

